

中国語圏における俳句の影響について  
——俳句の中国語訳を中心に（その二）

呉 衛峰

東北公益文科大学総合研究論集第三十八号 抜刷

二〇二〇年七月三十日発行

## 中国語圏における俳句の影響について

### ——俳句の中国語訳を中心に（その二）

呉 衛峰

#### はじめに

小林はかつて『日本古典俳句選』<sup>1</sup>の中国語訳の後記に、「試訳俳句的体会」（「俳句翻訳の心得」という小文を加え、彼の俳句翻訳観をまとめた。そこで彼は

個人的意見では、翻訳はオリジナルの俳句の内容や言語的特徴に合わせて、文語もしくは現代口語体を使い分けるべきである。格律詩や五言二行もしくは七言二行を使うべきでない（古典詩的定型は確かに漢詩の愛好者の趣味に合うが）。定型として固定してしまえば、口語的俳句の翻訳の場合、本来の面白さと声調をうまく伝えられないので、長短不揃いの詩行で訳すべきだと思う。

我と来て遊べや親のない雀 一茶

跟我来玩哟！没有亲娘的麻雀。

もし四言二句の「孤雀母哀、與我嬉来（孤雀哀しむ母れ、我と嬉び来れ）」、もしくは五言二句の「孤雀母心憂、與

(1) 中国語圏における俳句の影響について——俳句の中国語訳を中心に（その二）

我共嬉游（孤雀心を憂はず母れ、我と共に嬉遊せよ）（錢稻孫訳）とすれば、自由式の現代口語訳は原作の特徴をうまく伝えていると容易に結論できよう。一九二三年周作人が現代口語体で『日本の諷刺詩』（川柳狂歌）を訳したという前例がある。<sup>2</sup>

(2)

という見解を示している。1980年以降の和歌翻訳における五言四句定型の流れと異なる立場であり、俳句翻訳に関して林林の柔軟な姿勢が伺える。

ここに、林林は周作人と錢稻孫という日本文学研究の先駆者に触れている。俳句に関しては、周作人は1920年代の小詩運動に際して発表した文章があり、錢稻孫は日本占領下の北京で翻訳した『日本詩歌選』<sup>3</sup>があるのみで、二人とも踏み込んだ研究を行わなかったようである。

しかしながら林林の翻訳論から、両名の影響を看過することはできないことが分かる。本論はまず周作人の文章への考察を通じて、中国における「俳句翻訳御事始め」の一斑を覗きたい。

一

「日本の諷刺詩」（中国語：「日本の諷刺詩」<sup>4</sup>）は周作人が日本の川柳と狂歌を翻訳・紹介した文章である為、ここでは論じない。1921年から1923年にかけて、彼は少なくとも「日本の詩歌」（中国語：日本の詩歌）<sup>5</sup>、「一茶の俳句」（中国語：「一茶の俳句」）<sup>6</sup>、「日本の小詩」（中国語：「日本の小詩」）<sup>7</sup>という三つの文章を発表し、俳句を紹介・翻訳している。

文章の作成時間を見ると、「日本の詩歌」は文末の注記で、1921年3月より「二年前の旧作」という説明があり、

1918年～19年の創作と考えられる。「一茶の俳句」は文末では1921年7月25日と記されている。<sup>9</sup>「日本の小詩」は二年ほど遅れた1923年3月と注記されている。内容上の重複も見られるが、三番目の「日本の小詩」は俳句の歴史についての紹介および訳出された句数からして、最も詳しいものになる。なお、周作人の言う「日本の（古典）詩歌」には漢詩が含まれないことを断っておく。

新文化運動の主力の一人として、周作人は終始現代口語体による翻訳を主張しており、以下の考え方を持っている。

仏典翻訳の鳩摩羅什が言うには、「翻訳とは、ご飯を噛み砕いてから人に食べさせるようなことだ」という。それは当たっている。本気で良い翻訳を出そうとすれば、翻訳しないに越したことはない。翻訳すると、二つの欠点がある。一つはいつもつきまとう。私見では、その欠点はそもそも翻訳の本質であるが。その一、中国語に訳した以上、原文に及ばない。原文と同じようにしようとすれば、Theokritosに中国語を学んでもらい、中国語で書いてもらうしかない。その二、外国の作品の訳だから、声調の整った読みやすい漢文らしくない。もし漢文と同じようなスタイルなら、きつと自分勝手に書き直したものとなり、本当の翻訳とは言えないだろう。

二、口語体で詩を書くなら、韻を踏んだ五言七言を使う必要がない。呼吸の長短にしたがって文を切ればよい。いま訳している歌は、以上の方法で試みている。これは私のいわゆる「自由詩」である。<sup>11</sup>

また周作人は「一茶の俳句」の最後に、和歌や俳句の翻訳に関して、ラフカディオ・ハーンの日英翻訳を参考に、原文のローマ字と散文的直訳の対訳型を音声上・意味上の最高の組み合わせとしてしている。<sup>12</sup> その一例として、周作人訳の芭蕉名句を見てみよう。（○の付いた日本語原文の引用は筆者によるものである。以下同。）

○古池や蛙飛びこむ水のおと 芭蕉<sup>13</sup>

Furuike-ya kawazu tobikommu mizu-no oto.

古池呀，——青蛙跳入水里的声音。<sup>14</sup>

切れ字の「や」は、「呀」という感動詞および二本の棒線で表現されている。後の「日本の小詩」でも、俳句の必須条件として季題と切れ字（切れ字のない「切れ」を含む）が挙げられているが、「切れ」と表裏一体となるはずの「取り合わせ」が言及されていない。

さらに数例の芭蕉句を挙げよう。

○初しぐれ猿も小蓑をほしげ也 芭蕉<sup>15</sup>

下时雨初，猿猴也好像着小蓑衣的样子。<sup>16</sup>

○かれ朶に烏のとまりけり秋の暮 芭蕉<sup>17</sup>

枯枝上乌鸦的定集了，秋天的晚<sup>18</sup>

確かに散文的直訳に近いものの、周作人の淡泊で流麗な現代口語体には詩情がおのずから滲み出ている。興味深いことに、周は芭蕉俳句の特徴を紹介する際には、枯淡閑寂で禅味が出ており情に富むので読者の参加によるものが多いと力説する。しかし時代の要請に答えるためか、例として訳した句には、下記のような感情を吐露するものが多い。

○うき我をさびしがらせよかんどどり 芭蕉<sup>19</sup>

多愁的我，尽使他寂寞罢，闲古鸟。<sup>20</sup>

○塚もうごけ我泣声は秋の風 芭蕉<sup>21</sup>

坟墓也动罢，我的哭声是秋的风。

○旅に病んで夢は枯野をかけ廻る 芭蕉<sup>22</sup>

病在旅中，梦里还在枯野中奔走。

「日本の詩歌」では、周作人は日本の古典詩歌（和歌・俳句等）と漢詩を比較し、主に言語の面で両者の違いを考察した。例えば絶句にある「孤舟蓑笠翁，独釣寒江雪（孤舟 蓑笠の翁、独り釣る寒江の雪）」（唐・柳宗元、「江雪」）は冬季題の俳句に似ているが、「孤」と「独」の連用で「言い尽くし」の嫌いがある。また、「漠漠水田飛白鷺（漠漠たる水田 白鷺飛ぶ）」（唐・王維、「輞川積雨」）なら、ほぼそのまま完全な俳句的境地を描出しているが、中国語の七文字では声調の関係で、読むとき息が伸びきれないので、十分な印象を残すほどの独立した詩として鑑賞されず、もっと長い詩の一部として認識されてしまう。

さらに周作人は俳句の含蓄について、「鶯」の例を取り上げ「guisu（うぐいす）」と日本語では四音となり、中国語ではただの一音であるが、単音の「鶯」は四音の「guisu（うぐいす）」より含蓄的だとは言えないという見解を述べている。即ち四音の「うぐいす」の一句十七音における長さ故、読者に深い印象を与えられ、想像する余地を残しているという考えである。本説の是非はさておき、和歌を含む日本の古典詩歌における「鶯（うぐいす）」には、鳴き声が春の到来を知らせるといって「本意」の存在が言及されていない。

「日本の小詩」には、芭蕉のほか、蕪村と子規も紹介・翻訳されている。蕪村については、蕉風の淡墨的イメージと異なり、より絵画的であり、色彩的であることが強調された。芭蕉と比べ、人事を詠みこんだ句が多いことも説明されている。翻訳は三句ある。

○柳散清水澗石処々 蕪村<sup>23</sup>

柳叶落了，泉水干了，石头处处。<sup>24</sup>

○四五人に月落かゝるおどり哉 蕪村<sup>25</sup>

四五人的上头月将落下的跳舞呵。

○易水にねぶか流るゝ寒かな 蕪村<sup>26</sup>

易水上流着葱叶的寒冷呀。

「柳散」の訳は、そのまま散文的直訳とも言えるが、四文字の繰り返しが原文のリズムをうまく移し、周作人の文章の特徴である淡泊な妙趣が感じられる。「四五人」および「易水」の訳は、動詞の連体形まで移しているの、「月将落下的跳舞」、「流着葱叶的寒冷」という、魯迅の「硬訳」に近い、非常に読み慣れない中国語文になっている。円熟期に入ってから周作人の翻訳とは明らかにスタイルが異なる。ただ、「日本の小詩」は紹介的文章であり、翻訳集ではないことを考慮に入れれば、彼の上記の「直訳」の目的が理解できよう。

「日本の小詩」には、俳句の形式の特徴として、古代ギリシアのエピグラムや中国の絶句よりも短いことが挙げられている。周によれば、他国の短詩型は短くても省略はないのに対し、俳句は往々にして独特の助詞を用いる、数語しか使わない省略法がゆえに、シンタクスの不完全ではあるが、言外の意を醸し出すには最適な詩形となっている。このような認識から出発して、周訳は読者に原文の形式的特徴を理解してもらうために、中国語のシンタクスでは自然な長い連体修飾に直訳したと考えられる。

子規と碧梧桐の句の訳にも部分的にこの特徴が確認される。

○蜂の子の蜂になること遅き哉 子規<sup>27</sup>

蜂窩の子、化成黄蜂的缓慢呵。

○飲み水を運ぶ月夜の漁村かな 碧梧桐<sup>28</sup>

运着饮水的月夜的渔村。

前者は原文の「遅き」を体言化して、「蜂になること」をその体言「缓慢」の連体修飾語として訳されている。原文を直訳するというより、「呼吸の長短にしたがって文を切ればよい」との原則に従った訳ではなからうか。後者は、原文は切れ字「かな」の前は一つの名詞「漁村」とその連体修飾語のみからなるのに対し、訳は「かな」を移さず、中国語詩に見られない、長い連体修飾につづく体言止めになっている。

周作人はまた詩形と内容との関係について論じ、俳句は純粹な抒情がほとんどなく、写實的（もしくは「寄物陳思」的）な作品が多いと指摘している。元禄時代の抒情も寂寥悲哀の方が中心であり、恋を謳うなどのロマンチズム的抒情はない。彼が結論として提示したのは、俳句の十七文字は省略と凝縮を重んじる詩型であり、観照と詠嘆に相



応しい形であるので、和歌や新体詩のような豊富な抒情には向かないという考えである。子規の『俳諧大要』における主張と一致している。

文章を作る者、詩を作る者、小説を作る者、俄かに俳句をものせんとしてその語句の簡単に過ぐるを覚ゆ。曰く、俳句は終に何らの思想をも現はす能はずと。しかれどもこれ聯想の習慣の異なるよりして来る者にして、複雑なる者を取て尽くこれを十七字中に収めんとする故に成し得ぬなり。俳句に適したる簡單なる思想を取り来らば何の苦もなく十七字に収め得べし。縦よしまた複雑なる者なりとも、その中より最文学的俳句的なる一要素を抜き来りてこれを十七字中に収めなば俳句となるべし。<sup>30</sup>

正論であり、現在の伝統俳句の発展にも有益な指針だと思う。

## おわりに

周作人は、近代の『石川啄木詩歌集』<sup>31</sup>を翻訳したことを除いて、纏まった歌集もしくは句集の翻訳を出していないので、俳句を紹介する文章を通じて彼の翻訳観を見てきた。

周作人の翻訳は、林林が取っている原文に合わせて「文語もしくは現代口語体を使い分ける」という手法ではなく、新文化運動以降は全て現代口語体によるものである。

しかも紹介するという前提であったので、訳自体は余計に「同化翻訳」から離れ、オリジナルの日本語俳句の言語構造や声調リズムを再現しようという姿勢が顕著になる。

本論の冒頭を振り返れば、林林はそもそも一茶の口語的俳句の翻訳を取り上げた時、先駆者周作人の前例に頼ったので、筆者には少し「一茶の俳句」を紹介する義務も生じてきた。実際、「日本の詩歌」にはすでに三句翻訳され、一句目は名句「瘦蛙」である。

○瘦蛙まけるな一茶是に有 一茶<sup>32</sup>

Yasegaeru, makeruna, Issa koreni arii

瘦蛤蟆，不要败退，一茶在这里！<sup>33</sup>

林林訳：

瘦青蛙，别输掉，这里有我一茶！<sup>34</sup>

周作人訳のほぼ百年後の現在で読むと、周作人の直訳と比較して、林林の訳は言葉遣いとリズムの両面で優っていると  
言わざるを得ない。

「一茶の俳句」は一茶の生涯および俳風を簡潔に紹介した文章である。芭蕉や蕪村と異なり、平民の視線より詠まれた、人情溢れて俗語の多い一茶の俳句は、周作人と林林の二人に特別の共感を得られている。もう一句掲げてみる。

○雀の子そこのけく御馬が通る 一茶<sup>35</sup>

小雀儿，回避罢，回避吧！马来了呵！<sup>36</sup>

林林訳：

小麻雀，躲开，躲开；马儿就要过来。<sup>37</sup>

前の句と同じく、現在の視点から見れば、どうしても林林の現代口語体が自然的でリズムが良い。両訳の間に、半世紀以上の隔たりが存在し、現代口語体の發展はおそらく日本と同じく、戦前と戦後とはかなりの差があるので、この二句だけを見て優劣を判別するのは不公平になる。戦後訳の『石川啄木詩歌集』を読めばその差が理解できる。

周作人の俳句翻訳への考察が半ば彼の俳句理解の分析になっていることは否めない。ただし、先駆者の周作人の俳句紹介および翻訳を分析してはじめて、1980年代以降の俳句翻訳に存在する様々な問題点が理解できよう。林林による文語と口語の「使い分け」という方法も、周作人と錢稻孫の両方から影響を受け、融合させた手法ではなからうか。

注…

<sup>1</sup> 初版・湖南人民出版社、1983年12月。再版・人民文学出版社、2005年5月。「俳句翻訳の心得」(原文… 试译俳句的体会) は1985年の文章で、再版のみに載っている。

<sup>2</sup> 同書再版、一二〇～一二二頁。翻訳は筆者による。原文…

依我个人的看法，审查原俳句的风格，什么精神与体态，如用文言合适就用文言，如用白话合适就用白话，不固定规格律诗型，五言二行或七言二行（虽然这种形式，较适合汉诗读者的审美习惯），如固定下来，便使那些口语俳句，无法更好的传神，不如用长短句更自由些。如…

我と来て遊べや親のない雀 一茶

跟我来玩哟！没有亲娘的麻雀。

若以四言『孤雀母哀，与我嬉来！』或五言『孤雀母心忧，偕我共嬉游』（钱稻孙所译句），稍作比较，容易看出还是用自由式更能传达原作的精神。一九二三年周作人译《日本的讽刺诗》（川柳狂句）即用白话译出。

3 北京近代科学図書館編、文求堂書店発行、1941年4月。

4 1923年5月。後に『談龍集』（初版：開明書店、1927年12月）に収められる。

5 『小説月報』12巻5号（1921年3月20日）に掲載。後に『藝術與生活』（初版：群益書社、1931年2月）に収められる。本論における引用は止庵編『周作人自編文集・藝術與生活』（河北教育出版社、2002年1月）による。

6 最初は「日本詩人一茶的詩」と題して『小説月報』12巻11号（1921年11月10日）に掲載されたが、後に訳詩集『陀羅』（新潮社、1925年9月）に収められ、現題に改題された。本論における引用は鍾叔河編訂『周作人散文全集』第2巻（広西師範大学出版社、2009年5月）による。

7 1923年4月3日より『晨報副鐫』に掲載。後に『藝術與生活』に収められる。本論における引用は『周作人自編文集・藝術與生活』（河北教育出版社）による。

8 『周作人自編文集・藝術與生活』、一二一～一二二頁。

9 『周作人散文全集』第2巻、四七二～四七三頁。

10 『周作人自編文集・藝術與生活』、一三二頁。

11 『古詩今譯』Apologia（題記）、1918年2月刊『新青年』4巻2号。引用は『周作人散文全集』第2巻、一二一～一二三頁。吳衛峰「白話か文言か…日本古典詩歌の中国語訳について（その二）——周作人の場合」（『東北公益文科大学総合研究論集』第17号、2009年12月）を参照。

12 『周作人散文全集』第2巻、四七三頁。

13 井本農一・堀信夫注解『松尾芭蕉集』① 全発句』新編日本古典文学全集（小学館、1995年7月）、一四八頁。

周作人の俳句翻訳には日本語が付いていないので、本論における俳句原文の引用はすべて筆者によるものである。

- 14 『周作人自編文集・藝術與生活』、一一七頁。
- 15 『松尾芭蕉集① 全発句』、三一八頁。
- 16 「日本の詩歌」『周作人自編文集・藝術與生活』、一一九頁。
- 17 『松尾芭蕉集① 全発句』、七〇頁。
- 18 「日本の小詩」、一二五頁。
- 19 『松尾芭蕉集① 全発句』、三七六頁。
- 20 「日本の小詩」、一二五頁。以下同。
- 21 『松尾芭蕉集① 全発句』、二九三頁。
- 22 『松尾芭蕉集① 全発句』、五〇二頁。
- 23 尾形仿校注『蕪村俳句集』（岩波文庫、1989年3月）、九六頁。
- 24 「日本の小詩」、一二六頁。以下同。
- 25 『蕪村俳句集』、九四頁。
- 26 『蕪村俳句集』、一五三頁。
- 27 『子規全集』第3卷（講談社、1977年11月）、二五七頁。
- 28 『高濱虚子・河東碧梧桐集』現代日本文学大系19（筑摩書店、1968年12月）、三四五頁。
- 29 「日本の小詩」、一三〇頁。
- 30 岩波文庫、1955年5月。一三二―二四頁。
- 『子規全集』第4卷（講談社、1975年11月）三五六頁に同じ内容が載っているが、漢字旧字体が使用されていることおよび句読点のないことに鑑み、引用は漢字が新字体で句読点のある岩波文庫に依った。

- 31 人民文学出版社、1962年1月。下立強との共同訳であるが、周作人は主要訳者である。
- 32 丸山一彦校注『新訂 一茶俳句集』（岩波文庫、1990年5月）、二四三頁。
- 33 「日本の詩歌」、一一九頁。
- 34 『日本古典俳句選』再版、一二二頁。
- 35 『新訂 一茶俳句集』、二八七頁。
- 36 『周作人散文全集』第2巻、四六八頁。
- 37 『日本古典俳句選』再版、一二〇頁。